



『この道は』…

かいりじちょう とみた ただかず
ちいしば会理事長 富田 忠一

“この道は いつか来た道

ああ そうだよ あかしやの花が咲いている… “

ねんぱい 年配のみなさんなら誰しも聞き覚えのある北原白秋作詞、山田耕筰作曲の日本の代表的な童謡『この道』のみちの説です。この曲の詩には、白秋が晩年に旅した北海道の風景や幼少期から学生時代、母と過ごした南筑後じょうけいの情景が描かれているということです。どこか、なつかしくももの悲しい曲調に哀愁が漂います。

さくねん 昨年11月の国会答弁において、高市総理が台湾有事に言及し、「存立危機事態になり得る」と発言したことにより、中国が強く反発して一気に日中関係が悪化してしまいました。年明け、1月2日にはトランプ大統領はベネズエラを攻撃して、マドウロ大統領を拉致しニューヨークへ移送するという明らかに国際法や国連憲章に違反する暴挙に及んだにもかかわらず、日本政府はこのことに対して反対表明もせず評価を避け続け、琉球諸島へのミサイル配備を急ピッチで進め GDPの2%を突破する多額の予算を防衛費につぎ込んでいます。また、北朝鮮がミサイル発射するたびにニュース速報が報じられ、Jアラート(全国瞬時警報システム)なるものまで配備し、国策として国民の有事への危機感がどんどん煽られているように感じます。その一方でこの物価高の中、福祉サービス(介護、障害ともに)の基本報酬額は据え置かれたまま(次年度の臨時報酬改訂に期待したい)です。補正予算において介護職(障害含む)の職員の賃上げのための補助が決定されたが、離職者が後を絶たない現場では欠員補充のために人材紹介会社へ驚くような競争が繰り返され、現状の事業を維持することすら困難になりつつある福祉事業の危機的状況は報道すらされません。

こくみん 国民の平和を維持することや持続可能な国際社会を築くための話し合いによる外交ではなく、武力や威嚇による外交が優先され、軍事化していく社会に国民が慣らされていきつつある昨今の社会状況は、二度の大戦を経験した私たちの国が「いつか来た道」のように思えてなりません。

いま 今、日本国民にとっての真の危機は、武装によって取立てつくり出された危機ではなく、数年後、確実に迫りくる超高齢化社会ではないのでしょうか。労働人口の減少による経済的危機に加え介護を必要とする高齢者の急増に対応できない介護保険制度や介護を担う福祉人材不足による福祉サービス崩壊の危機です。政府には過去の過ちを繰り返すことなく、平和的な話し合いによる外交で避け得る危機を回避して、介護や支援が必要な人たちはもちろんのこと、誰もが安心して老いることのできる社会づくりに多くの予算を投じてもらいたいと願ってやみません。このおたよりが届く頃には無意味で無駄遣いの選挙結果も出ているのでしょうか、戦争という過ちへ続く「いつか来た道」ではなく、「平和へ繋がる道」を選択できる私たちでありたいと願います。

「現場からお伝えします!」

しゅにん よねだ まちる
グループホーム主任 米田 守

福祉の現場は、もはや限界に達しています。慢性的な人手不足、辞めては入りの繰り返し、育成する余裕すらない現実。そのしわ寄せはすべて現場と利用者に押し付けられています。なぜ、こんなことになったのか? その根本には、政治が進めてきた「労働政策」の失敗がひとつあります。小泉内閣以降の規制緩和は、「改革」という立派な言葉の裏で、雇用の安定を切り捨て、人材紹介、人材派遣、非正規雇用を福祉分野にまで広げました。本来、対人支援技術で人を育て積み重ねなければならない現場を、市場原理にさらした政治の責任は重いと言っても過言ではありません。

またその当時、政策の中心にいた竹中平蔵氏は後に株式会社パソナの会長(役員)となり、人材ビジネスの拡大とともに大きな影響力を持ち続けました。(2022年に退任)企業側もレントシーキングが目的だったのでしょう・・・。政治の中核で制度を動かした人物が、次には民間企業側に入り、その政策の恩恵を受け、所有する株で大儲けするこの構図に多くの国民は強い違和感と怒りを抱いたと思います。「誰のための改革だったのか?」

「労働者の声はどこにあったのか?」と。

さらに看過できないのは、現在、その株式会社パソナに全国に先駆けて奈良県障害福祉課は「福祉人材育成研修事業」・「外国人材受け入れ支援事業」を委託し、その事業をさせています。(こんなことだけ早いんです・・・と言いたい) という事実です。現場を不安定にした政策と深く関わってきた企業が、今度は「福祉人材育成研修事業」「外国人材受入支援事業」を受託して公金を受け取るこんな矛盾を、政治や行政はどう説明するのでしょうか? 責任の所在を曖昧にしたまま、問題をつくった側に再び役割と利益を与える(人材育成? ふざけるな! ・・・と言いたい) これが今の政治や行政の現実です。

福祉は市場の道具や人がいなくなれば外国人を雇えばいいというような簡単な仕事ではありません。政治や行政が責任を持って守り、支えるべき公共の基盤ではないでしょうか? にもかかわらず、現場の声は軽視され、政策と利権だけが

優先されてきました。このままでは、福祉はもちません。

また生産性もない吸血鬼のような人材スパイラルビジュネスも今は絶好調ですが・・・

こんな仕事いつまでもつのでしょうか? 現場で働く人を守らずして、制度だけを語る政治や行政に、もはや未来は託せません・・・。「以上 現場からお伝えしました!!」



—ぼくも わたしも みんなが主役！！—

—高島 努さんの場合—

僕は園芸グループでブルーベリー栽培の作業をしています。ブルーベリーは夏に実を収穫した後、枝がどんどん成長し、1m以上も伸びます。秋に葉っぱが落ちた後、のびすぎた枝を冬の間に剪定します。職員が、枝にテープで目印をつけているところを、剪定はさみを使って切っていきます。太い枝は大きな剪定ハサミで、細い枝は小さい剪定ハサミで他の枝を傷つけないように注意しながら切っていきます。



室内作業では、喫茶ドンキーで販売している駄菓子を入れる袋を、チラシや新聞紙で作っています。折り目を付ける道具を使ってみんなで分担して作っています。喫茶で駄菓子を買ってくれたお客様から『袋があって助かる』と言ってもらえるのが嬉しいです。僕は、体が大きくて、手もとても大きいですが手先が器用で細かい作業が得意です。はさみや道具を使ってみんなと楽しく作業に取り組んでいます。

—梅野 玲子さんの場合—

わたしは軽作業2で作業しています。いちばん好きな作業は、ミサトっこ草履作業です！1月になつたら草履のお仕事があると聞いていたので楽しみにしていました(●'◡'●)



草履をビニール袋にいれてテープを貼る作業は、むずかしいです。ビニール袋に草履をいれます。おはしで草履が動かないようにおさえます。ビニール袋をしわにならないように、きれいに引っぱります。セロテープをとめてできあがり！



おはしを使つたらむずかしい袋いれも綺麗にできるので嬉しいです。

作業がおわつたら納品にいきます。車にのつていくのがすきです。納品の順番がくるのがまちきれません！

2026年1月17日(土) 本法人職員研修会「ハンセン病差別に学ぶⅡ」(公開講座)を開催しました。
 当日は、ハンセン病回復者支援センター コーディネーター加藤めぐみさんとハンセン病回復当事者で
 ハンセン病関西退所者原告団「いちょうの会」のM.Mさんにお越しいただきお話を伺いました。

—「知らなかつたで済まされない！」—

グループホーム職員 増田広正

ゴミ同様、人をトラックに積み込み収容隔離し断種・墮胎を強制し、病気が治っても社会復帰できないようにした。元患者の本名も苦悩の過去も友人に打ち明けることもさせず「墓場まで持つて行く」と思われた。その国策、無らい県運動は無慈悲で惨かった。主導した光田健介氏の支援に廻った笹川良一氏は、活動を三男の陽平氏に引き継いだ。日本財団会長、陽平氏はこれまでの「隔離政策」が産んだ負の遺産を解消しようと世界中を飛び廻りWHOハンセン病制圧大使にもなっている。財団は国立ハンセン病資料館運営を受託しているが、「患者を救おうとした人々」の美談を強調するため職員を入れ替えようとしている。昨年の万博パビリオンでも同様に眞の歴史をねじ曲げる意図があったと指摘されている。大阪の外島保養院は夢洲の近隣で海拔ゼロ地帯。室戸台風で甚大な災害で多くの患者が犠牲になった。その暗い過去を覆い隠すように万博が開催され、I.R施設も今、建設中である。笹川良一氏の番頭(運転手・秘書)だった松井良夫氏の息子、松井一郎元知事が夢洲に誘致したのだが、黒い構図が見えてくる。I.Rカジノで生まれる哀れで悲惨な中毒患者の「救済」事業を財団は画策する。博打・ボートレースで稼いだ金を投入し、更なる利益と美談を自論んでいる。偽善の慈善に騙されず眞実を見破らなければ、無らい県運動と同様のスパイ防止法によってまた戦争にも巻き込まれていくだろう。「笹川平和財団」からテレビ定番に送り出されてくる軍事専門家の語りにも注意が必要である。差別の歴史は単に無知からではなく、無知を利用して私利私欲を肥やそうとする族やそれを産み出す社会システム、その道具になっている国によって繰り返されるのだ。

ちいしばだ園職員 犀道香織

みなさんはハンセン病と聞いてなにが頭に浮かんできますか?私は顔面に変形があらわれる(写真を見た記憶から)怖い病気だという漠然としたものしかありませんでした。それに、自分の周りでハンセン病の話なんてしたことがなかったので正直に言うと気にして生きてきました。今回の研修で当事者の方々のインタビュー映像を拝見させて頂き、あまりの衝撃に涙が勝手に落ちてきました。まさか国が患者を強制隔離のために療養所という名の監獄に強制入所させ、断種・墮胎・えいじ殺を行っていたなんて…更に私が驚いたのは、今現在も療養所で暮らしている方々がいることでした。ハンセン病は適切な治療を受ければ完治し、感染力も消失するといった正しい知識よりも国の政策によって植え付けられた誤ったイメージが定着されて今でも多くの人に偏見が残っているからではないでしょうか。もちろんそのうちのひとりは私です。正しい意識で、正しい知識を持つことが偏見を防ぎ差別解消につながるのだと学びました。私は今回の研修で正しい知識を得る機会をいただきました。それは、お話を下さった当事者の方々のおかげです。研修当日講師としてきてくださった当事者のMさんが「自分がハンセン病だったという事は墓場までもっていく」とおっしゃっていました。物事に対して正しい知識と理解を持ち差別問題を他人ごとにしないで誰にとっても住みやすい社会をめざしましょう!

次回の法人職員研修「ハンセン病差別に学ぶⅢ」(公開講座)は、2026年3月20日(金・祝)、午前9時30分～ちいしばだ園会議室で開催予定です。公開講座にご参加いただける方は、事前のご連絡をお願いします。2026年度も法人職員研修のテーマは「ハンセン病差別に学ぶ」を継続します。
 2026年6月13日(土)は、ハンセン病患者や家族への差別の現実を描いた映画「新・あつい壁」の上映会をちいしばだ園で開催します。詳細は次号のちいしばだより、ホームページで案内します。

ちいきれんけいしんかいぎ かいさい
「地域連携推進会議が開催されました」しゅにん よねだ まもる
グループホーム主任 米田 守

ちいきれんけいしんかいぎ しょうがいふくし きょうどうせいかつえんじょ
地域連携推進会議は、障害福祉サービスであるグループホーム（共同生活援助）において、
ねん かいじょうかいさい こんねんど ぎむづ かいぎ ちいきじゅうみん じちたい
年に1回以上開催することが今年度より義務付けられている会議であり、地域住民や自治体、
りょうしゃ りょうしゃかぞく かんけいきかん がいふ してん と い うんえいじょうきょう かだい
利用者、利用者家族、関係機関など外部の視点を取り入れ、グループホームの運営状況や課題
どう きょうゆう もくでき せいじょう ちいき ひら うんえい おこな しつ
等を共有することを目的としています。制度上は、地域に開かれた運営を行い、サービスの質
かくほ しく かくほ
を確保するための仕組みとされています。

かいぎ せいど もと はいけい げんざい しょうがいしゃ と
しかし、この会議が制度として求められている背景には、現在の障害者グループホームを取り
まきび げんじつ おも ほんらい しょうにんづう かていてき かんきょう なか
巻く厳しい現実があるように思えます。本来、グループホームは少人数で家庭的な環境の中、
りょうしゃひとり せいかつ ささ ぱ みんかんきょう さんしゅう すす なか
利用者一人ひとりの生活を支える場であるはずです。ところが、民間企業の参入が進む中、
ほうしゅうたんか す お まんせいてき じんざいぶそく い はいがい すこ おお りょうしゃ う い
報酬単価の据え置きや慢性的な人材不足と言った背景から少しでも多くの利用者を受け入れなけ
れば経営が成り立たずグループホームの大型化が進んでいます。その結果、職員一人ひとりの
ふたん ま ていねい しょん い とど げんば う じょうきょう なか
負担が増し、丁寧な支援が行き届きにくい現場も生まれています。そのような状況の中で、
りょうしゃ じゅうぶん しょくじ ていきょう せいかつかんきょう ととの ふてきせつ しょん
利用者に十分な食事が提供されない、生活環境が整えられていない、あるいは不適切な支援
ぎやくたい いた じれい ぜんこく ほうどう けつ ゆる
や虐待に至る事例が全国で報道されるようになりました。これらは決して許されるものではありません
ませんが、結果として「地域の目を入れる」「外部の確認、チェックを受ける」仕組みが強化され
げんじょう わたし しょんしゃ じゅうぶん しんらい げんじつ しめ い
ている現状は、私たち支援者が十分に信頼されていないという現実を示しているとも言えま
す。また、眞面目に誠実な支援を続けている事業所ほど、会議や書類作成、説明責任に追われ、
ひへい あくじゅんかん お うたが ぜんてい しごと は
疲弊していくという悪循環も起きています。また「疑われることが前提」の仕事に、果たしてこ
ぶんや はたら おも ひと つよ き かん おぼ
の分野で働きたいと思う人がどれほどいるのでしょうか？強い危機感を覚えます。

いっぽう かいぎ しゅっせき いいん かたがた けんがくごさまざま いけん
一方で会議に出席していただいた委員の方々からはグループホームの見学後様々なご意見をい
ただきました。「グループホームを初めてみたが家庭的な雰囲気がよかったです」「いろいろな施設やグ
ループホームを見てきたがちいしばだ会のグループホームを選んで良かった」などなど・・・このよ
うに「地域連携推進会議」には、地域の方々にグループホームの存在を知つてもらうという重要な
いぎ とく さいがいじ ちいき じぎょうしょ りょうしゃ じょうきょう はあく
意義もあります。特に災害時には、地域が事業所や利用者の状況を把握していることが、
じんそく あんびくにん しょん かいぎ な りょうしゃ きょじゅうくうかん だいさんしゃ
迅速な安否確認や支援につながります。しかし、会議の名のもとに、利用者の居住空間が第三者
こうかい そんげん かんてん おお かだい ふく
に公開されることは、プライバシーや尊厳の観点から大きな課題を含んでいます。グループホー
ムは「施設」ではなく「生活の場」であり、その点への十分な配慮が欠かせません。
わたし ちいきれんけいしんかいぎ たん けいしきてき ぎ む
私たちには、この「地域連携推進会議」を、単なる形式的な義務やチェックだけの不信の象徴と
お せいかつ ば てん じゅうぶん はいりよ か
して終わらせるのではなく、グループホームの利用者と地域が対等に向き合い、利用者の尊厳を守
ほんらい すがた と もど ば い ひつよう
りながら本来あるべきグループホームの姿を取り戻すための場として活かしていく必要があると
かんが ひえます

「フードレスキュー」から始まつたこと

ちいしば会評議員 おおひら 大平 和幸

私は、人口減少が著しく、人の姿が見えないような地域で暮らしている。昨年10月末、近所のB君宅の入口で「フードレスキュー」と記された看板を見つけた。そこには食料に困窮していること、出来れば食料を提供してほしいことが書かれてあった。私は直ぐに常会長(自治会長)と共にB君宅を訪問し、「看板を見たけど、いったいどうしたん」と尋ねた。B君は「体調が悪くて帰つて来た。けど、しばらくすると仕事も決まる。今、食料が不安で、ガスも電気も止まっているし、友人がフードレスキューのことを教えてくれたので上げた」と事情を語った。

B君はずつと派遣の仕事で各地を転々としていて、仕事が切れると自宅に戻り、よく声をかけてくれた。彼には帰れる場所があるから、まあいいか、とずっと思ってきたが、今回は事情が違う。常会長が村に相談すると、村はあらためて事情を聞き、食料を提供してくれた。私は一旦はこれで落ち着くのか、と高を括っていた。

その後、B君の隣の家のC君が彼の姿を見かけては、私に電話をしてくるようになった。「痩せてガリガリや」「昼間に庭でたき火してる(危ない)」云々。C君はB君と近い年齢でB君の姉と同級生。人情深く、地域のことによく気を回してくれる。C君は、B君の親戚で自分にとっても幼馴染の人には「一度様子を見てほしい。できれば詳しく事情を聴いてもらって、食料も不足しているし、カセットコンロがあつたらいい」などと伝えていた。

12月1日にC君から、「Bがまた看板を上げた」と、写真が送られてきた。「12月18日まで、食料を提供してくれたら嬉しい」という看板だった。常会長と改めて相談し、B君にとっては、地域の幼馴染であり親戚でもある姉妹に相談することにした。B君の今の生活困窮を解消し、ずっと絶縁状態にある自身の姉との関係を修復できればと考えた。最初は「私たちにも家庭がある。長い間会ってないし…」と消極的だったが「僕も立ち会うので、一度妹さんとも相談して」と伝えられた。翌日早速返事があり、私も立ち会うなかで姉妹はB君と会うことになった。ホントに久々の対面になったという。姉妹は私から事情を聞いて心配した、仕事の事、体調の事、姉との関係については、二人だけの家族だから何とかこの機会に修復できれば、と話し合った。妹の方はとても心配したそうで、私は隣りで思いを聞いていて言葉が出なかった。

その後、B君のスマホが回復したので、時々、電話をしている。つい最近では、今年の厳しい寒さを凌ぐためにカイロを体にいっぱい張って寝ていること、米を食べないと元気が出ないので、炊飯器を買ったこと、就職するために5社目の面接を受けること、体重が戻ってきたこと等々。

地域で暮らす人の姿がなかなか見えずに、閉塞感を抱くことさえある。それでもこの件を通じて血縁や地縁、そして幼馴染が一人の窮地に対して腰を上げた。それは私にとって小さな希望となった。地域の息づかいを実感しつつ、今後に挑みたい。



え の ほ ん
絵の本
ひろば

参加無料
ちらしに記述
申込不要

2026年3月18日(水)

10:00 ▶ 15:00
時間中、いつでも出入りできます

かふえ どんきー
cafe donkey
(ちいろば園)

絵の本あれこれ研究家 加藤啓子さんと ちいろば園のみんなが
250さつほどの写真本・料理本・おもしろ本などを
ならべてお待ちしています

かとうけいこさんのブログみてね

QRコード

ワークショップもするよ!
300円~

やきゅうグローブの革をつかって、
じぶんだけの こものをつくろう!

ミニパフェもあるよ!
300円

てづくりのケーキやクッキー、ブルーベリージャムを
つかった かわいらしいパフェだよ

おといあわせ
ちいろば園

0745-72-1923
奈良県生駒郡三郷町勢野北5-6-14

☆後援会費・ちいろばだより年間購読料 (2025年10月1日～2025年12月31日)

ありがとうございました。

篠原範子、窪田義廣、岡田登志、松藤みどり、浅井克哉、吉岡るり、若枝千鶴子、山本奈々、草苑幼稚園、藤澤信弘・ゆき子、藤澤信也

以上 敬称は略させていただきます。

※ ちいろばだよりの配達停止をご希望の方は、ちいろば園までご連絡ください。

二〇〇〇年十一月十一日

第三種郵便物承認

毎月(一・二・三・四・五・六・七・八の日)発行

—ブルーベリーの木オーナー募集—

ちいろば園で栽培しているブルーベリーのオーナーになりませんか?

オーナーのみなさんは、収穫時期(7月～8月)に選んだ株からお好きな時にお越し
いただき収穫するだけ! 収穫の手間はありますが、大変お得!!

収穫場所:ちいろば園 ブルーベリー畠

料 金:1～4株 ¥3,500/株 5～9株 ¥3,000/株 10株以上 ¥2,500/株

申込期間:4月1日から 株の選定期間:6月上旬頃

※ 申込、お問い合わせはちいろば園ブルーベリー担当まで...

TEL/0745-72-1923 FAX/0745-72-1924



ちいろば園から利用者の
みなさんへ出した今年の
年賀状です。
今年もよろしくお願ひし
ます



KSKS ちいろばだより

編集人／ちいろば会後援会

年4回 頒価 50円

連絡先／奈良県生駒郡三郷町勢野北5-6-14

TEL:0745-72-1923 FAX:0745-72-1924

ホームページ：<https://www.chiiroba.or.jp>

発行人／関西障害者定期刊行物協会

大阪市天王寺区真田山町2-2 東興ビル4F